厳冬に咲くマンテマ

登坂裕一

マンテマ *Silene gallica* L. var. *quinquevulnera* (L.)Koch（ナデシコ科）は、欧州原産の帰化植物で、海辺・川岸に多く、花期は春～夏、とされる（長田 1976)。新潟県では、各地で出版されている植物図鑑（たとえば『柏崎・刈羽の山野草』など）で、いずれも花期5～6月とされている。ところが、新潟市街地で昨年12月から雪にも負けず咲き続けているマンテマがあるのでここに報告する。

生育地（産地）

新潟市幸西3丁目昭和大橋南詰 7m:TY-（2005.1.10 IS-）[新潟391376-22、環境庁3次メッシュ 5639-6083]（写真　）

2004年12月上旬に花があるのに気づき、12月28日までほぼ毎日花を見た。気温が低いためか、なかなか枯れず、同じ花がほとんどそのまま咲き続けていた。当地は昭和大橋の南詰、付近の案内表示板が設置してある植升で、風当たりが強く、雪が積もっても他の所より早く消える。花をつけた大きな株はわずか3株だけで、以下の記録は全てこれらの株のものである。

2005年1月10日。この日、マンテマは雪をかむったが、ここの雪は数日で消えた。写真はこの日14:15に撮影したものである。写っている花の枝を採集し、さく葉標本にしたら、種子がこぼれ出てきた。単に開花が早いだけでなく、種子形成まで完了していたことに驚きを隠せなかった。おそらく、11月にはすでに開花していたのではないかと推察される。なお、この標本は新津植物資料室へ納めてある。

1月19日（水）積雪なし。花確認。果実が多い。

1月28日（金）積雪なし。花なし。果実多数。

1月30日（日）積雪なし。花2つ確認。

1月31日（月）・2月1日（火）再び雪の下になり、1日朝7:00の新潟市で積雪19cmの報道あり。ここの雪は数日で消えた。

2月7日（月）積雪なし。花1個と色づいたつぼみ数個確認。分岐して伸びた枝のうち、3～4本は上半分、枯死していた。積雪ではなく、寒風で枯れたらしい。

新潟市では雪がなければ、オオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウなどが1、2月から咲き始めることは希でない。しかし、これら帰化植物がいつ開花・結実していたかをきちんと記録した報告は少なく、マンテマのこのような早い開花の記録も見あたらない。

筆者は新潟市上所で2003年5月28日にマンテマの花の群生を写真撮影したことがあり、新潟市街地では、県内の他の地域より、花期が幾分早いという印象を受けた。

酒井昭治（1987）は、『新潟県の海辺の植物』でマンテマの花の群生写真（1982年6月14、19、28日撮影）、果実の写真（1984年8月19日撮影、写真は種子散布中の果実と思われる）を紹介しており、これが新潟県での本来の花期・果期であろう。大まかではあるが、このデータから、開花から約2カ月あれば種子散布に至ることも読みとれる。

木村彰（2004）は、『新津植物資料室年報2003』の「越後の植物観察記（その1)」マメグンバイナズナの項で、暖冬だった2002年3月31日、新潟市上所でマンテマが開花し始めていた、と記録している。木村の報告の生育地は環境庁3次メッシュ5639-6083にあり、本報告のマンテマ生育地と同じメッシュである。

『日本の帰化植物』清水建美編（2003）ではマンテマについて次のように記載している。母変種のシロバナマンテマ var. *gallica* は北海道～九州に分布、内陸県にない。花期4～5月。マンテマ var. *quinquevulnera* は本州（福島・新潟県以南）～九州に分布、内陸県にない。花期については記載なし。別な変種のイタリーマンテマ var. *giraldii* は花期3月下旬～6月。

また、原産地の欧州では、『THE WILD FLOWERS OF BRITAIN AND NORTHERN EUROPE』に、*Silene gallica* L. はイギリス、フランス、ドイツの一帯に分布し、花期6～10月、砂地に生えるとある。

インターネット上では、現地で見たものか、文献から引用したものかはっきりせず、やや信頼性を欠くが、花期の参考資料として次のようなものがあった。日本のサイトではほとんどが5～6月と紹介されているが、それ以外に、長崎で4～6月、九州下関「散歩中に見た花」で6～10月、富山県新湊市立奈古（ナゴ）中学校「野草散歩のページ」で4～6月。海外では *Silene gallica* L. として、ジブラルタルフロラで希、花期3～6(8)月、カリフォルニア THE COLD CREEK BASIN で花期2～6月。

これらをまとめ、種として花期を一番幅広くとらえても、2〜10月であり、12月・1月の開花はかなり時期がずれている。

マンテマは秋にロゼット葉を出して、そのまま越冬し、翌年5、6月に開花が本来の生活史である。それを12月開花や1月種子散布のように、極端に早められる適応能力は、異国の地で生き延びるため、あるいは勢力拡大のため、どのような意義があるのかたいへん興味が持たれる。今後刈り取られるまで、このマンテマの推移に注目したい。

文　献

柏崎植物友の会（1986）　柏崎・刈羽の山野草

木村　彰（2004）　越後の植物観察記（その1）　新津植物資料室年報2003:17

長田武正（1976）　原色日本帰化植物図鑑．保育社

Richard Fitter・Alastair Fitter他（1974）THE WILD FLOWERS OF BRITAIN AND NORTHERN EUROPE.Collins

酒井昭治（1987）　新潟県の海辺の植物:28

清水建美編（2003）　日本の帰化植物．平凡社

写真　マンテマ　新潟市幸西 3丁目 昭和大橋南詰 1m　Jan. 10, 2005